

## 学 会 記 事

### 第62回新潟臨床放射線学会

日 時 昭和62年 6月 6日 (土)  
午後 2時より  
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

#### 一 般 演 題

#### 1) Solid and Cystic Acinar cell tumor of Pancreas の1例

加村 毅・秋田 真一 (新潟大学放射線科)  
佐藤 敏輝・椎名 真

膵の Solid and Cystic Acinar Cell Tumor と考えられる症例を経験したので報告する。

症例は20歳女性。貧血精査のため来院し腹部腫瘍を指摘された。

検査成績では elastase-1 が 390ng/dl とやや高値。CEA, AFP, CA19-9, 尿中 VMA 値は正常。腹部エコーでは多彩な実質エコーを呈する腫瘍を左上腹部に認めた。CT では充実性、嚢胞性双方の部分ある腫瘍を認めた(石灰化なし)。上部消化管造影では胃体部大弯の圧排所見のみ。ERP では膵管の不整、狭窄は認めず主膵管の圧排のみ認めた。血管造影も圧排所見のみで encasement や腫瘍濃染像は認めなかった。

以上より膵腫瘍の診断にて摘出術を施行した。腫瘍は大きさ11×16×9 cm で被膜を有し断面は出血・壊死産物が充満し一部充実性。組織所見にて本症と診断された。若年女性に好発する予後良好な膵腫瘍の1つとして本症の存在を心に留め置くべきと思われた。

#### 2) 最近1年間の再撮影について

長沢 弘・大滝 広雄  
野口 栄吉・井上 智子 (新潟大学放射線科)  
山崎 芳裕・他一同

私共は13年前から各撮影室毎に、患者数や、撮影件数、曝射回数及び使用フィルム枚数等診療内容について調べ、それを全体で集計しているが、最近、再撮影についても項目別に調査したので、結果を報告する。

##### 1. 業務内容

年間総使用フィルム数	201,005枚
血管撮影	51,798枚

骨撮影	47,501枚
X線T V	38,589枚
胸腹撮影	29,075枚
断層撮影	12,009枚
泌尿、婦人科系	11,183枚
ポータブル	9,217枚
ライナック、コバルト	1,633枚

##### 2. 月別再撮影について

技師の交代期、4月、10月に再撮影は僅か上昇傾向にある。

##### 3. 撮影部所別再撮影について

血管撮影室、骨撮影室でロスフィルムが多かった。これはカテーテル操作あるいは、動き等が原因だった。

##### 4. 技師が関与する再撮影について

技師の手技ミスは全体の40.7%であった。

#### 3) 胸部専用(オルソCタイプ)フィルムの評価

関谷 勝・佐藤 静山 (新潟大学 医療短大)  
西村 義孝  
折笠 康宏・亀沢 利勝 (新潟県厚生連 糸魚川病院)  
内山 陽一

(目的) 胸部単純写真における抽出域の拡大法の一つとして開発された胸部専用フィルム(以下Cタイプ)HR-CとMGCについての性能評価を試みた。

(方法) Cタイプと稀土類増感紙G3との組合せについての物理的特性と、胸部単純写真の写真学的評価、医師と放射線技師による視覚的臨床評価とを従来のフィルムHR-S及びHR-Lについて比較検討した。

(結果) Cタイプは、従来のフィルムよりも低濃度部における感度が高く、鮮鋭度も向上し粒状性においても優れていた。胸部単純写真の濃度分布におけるCタイプの肺野濃度は、従来のフィルムと変わらないが、縦隔部、心臓陰影部の濃度が良く抽出されていた。又、胸部単純写真のアンケートによる視覚的臨床評価においてもCタイプは、従来のフィルムよりも縦隔部、心臓部の抽出に優れていると評価された。以上のことから、Cタイプは胸部単純写真の抽出域拡大に有用と考える。

#### 4) Glycosylated LDL の分離に関する検討

柏森 亮 (新潟大学医療短大)  
尾方 文雄・山田 幸男 (信楽園病院研究部)

今回は、glycosylated LDL の血管壁細胞の影響を知る目的で、血漿脂質蛋白の低比重リポ蛋白(LDL)を用い、affinity chromatography から分離・抽出する

検討を行った。

〔方法〕①血漿中からの LDL の単離は NaBr を用いた密度差の重層による超速心分離法を採用した。② glycosylated LDL の分離は固定化レクチン (Con-A; フェルマシア社) とカラムとによる affinity chromatography で 0.3M D-glucose で抽出した。

〔結果〕分離した glycosylated LDL について、0.75% アガロース電気泳動で定性したところ、コントロールの LDL に比し、その移動度が早い結果が得られた。

今後、この glycosylated LDL を用いた血管壁に対する影響 (代謝) の検討並びに定量的 (臨床応用) な確立を行う予定である。

### 5) 当科におけるパネコースト肺癌の臨床像と治療成績

小田 純一・島田 克己 (新潟大学放射線科)  
齋藤 真理・酒井 邦夫

1968年-1985年の18年間に当科を受診した Pancoast 型肺癌25例につきその臨床像と治療成績を検討した。

1) 臨床症状としては胸痛・背部痛がほとんどの症例でみられ、上肢痛・しびれが約半数にみられた。また、Horner 症候群を呈したものは4例と少なかった。

2) 初診医としては外科などの内科以外の科を受診しているものが 1/3 であり、内科に受診したものでもその約 1/3 が神経痛として治療を受けていた。また、病歴期間は平均4.5カ月と長かった。

3) 組織型は、扁平上皮癌と大細胞癌が半数をしめたが、小細胞癌も3例みられた。

4) 転移部位としては脳、リンパ節 (胸腔外) が多かった。

5) 予後は、放射線・放射線+手術、のいずれの治療でもきわめて不良で、2年生存は1例のみであったが、除痛効果は放射線治療例の 3/4 の症例で認められた。

### 6) 琉球大学付属病院における放射線治療患者の疾患分布

末山 博男・諸見里 秀和 (琉球大学放射線科)  
久志 享・中野 政雄

### 7) 画像上、小さな Extra-axial Tumor を思わせた脳表の Glioma の1例

—MRI と CT の対比—

登木口 進・倉島 昭彦 (新潟大学歯科)  
岡本浩一郎・伊藤 寿介 (放射線科)  
亀田 宏 (立川総合病院 脳外科)

CT では明らかでなかったが MRI で小さな Extra-axial Tumor を思わせた。脳表の Glioma (astrocytoma grade II) の1例を報告した。MRI では Tumor は IR (2000/500) で low intensity, SE (2000/40) で high intensity であり、脳溝を広げるように存在していた。CT では単純、造影とも low density であったが、明瞭ではなかった。本例のように病変が小さく、頭蓋骨直下にあるため CT では明らかでない小病変を有する部分でんかんに、MRI は今後、積極的に応用されるべきである。本例は37歳女性で、adversive seizure で発症した。

### 8) 中枢神経画像診断、その将来展望

伊藤 寿介・登木口 進 (新潟大学歯科)  
倉島 昭彦・岡本浩一郎 (放射線科)

## 記 念 講 演

画像医学 1987

蜂 屋 順 一 先生 (杏林大学)

## 第63回新潟臨床放射線学会

日 時 昭和62年12月19日 (土)

午後 2 時より

会 場 新潟大学医学部 第II講義室

## 一 般 演 題

### 1) 股関節 Avascular Necrosis の SPECT

清野 泰之・木村 元政 (新潟大学放射線科)  
小田野 幾雄

臨床的に大腿骨骨頭 Avascular Necrosis (AVN) が疑われた16症例、32関節に対し骨シンチを施行し、Planar 像及び SPECT を撮影した。Planar 像で大腿骨骨頭への集積が陽性とした27件中、SPECT で骨頭への集積が確認されたものは11件のみであった。他の16件は実際に